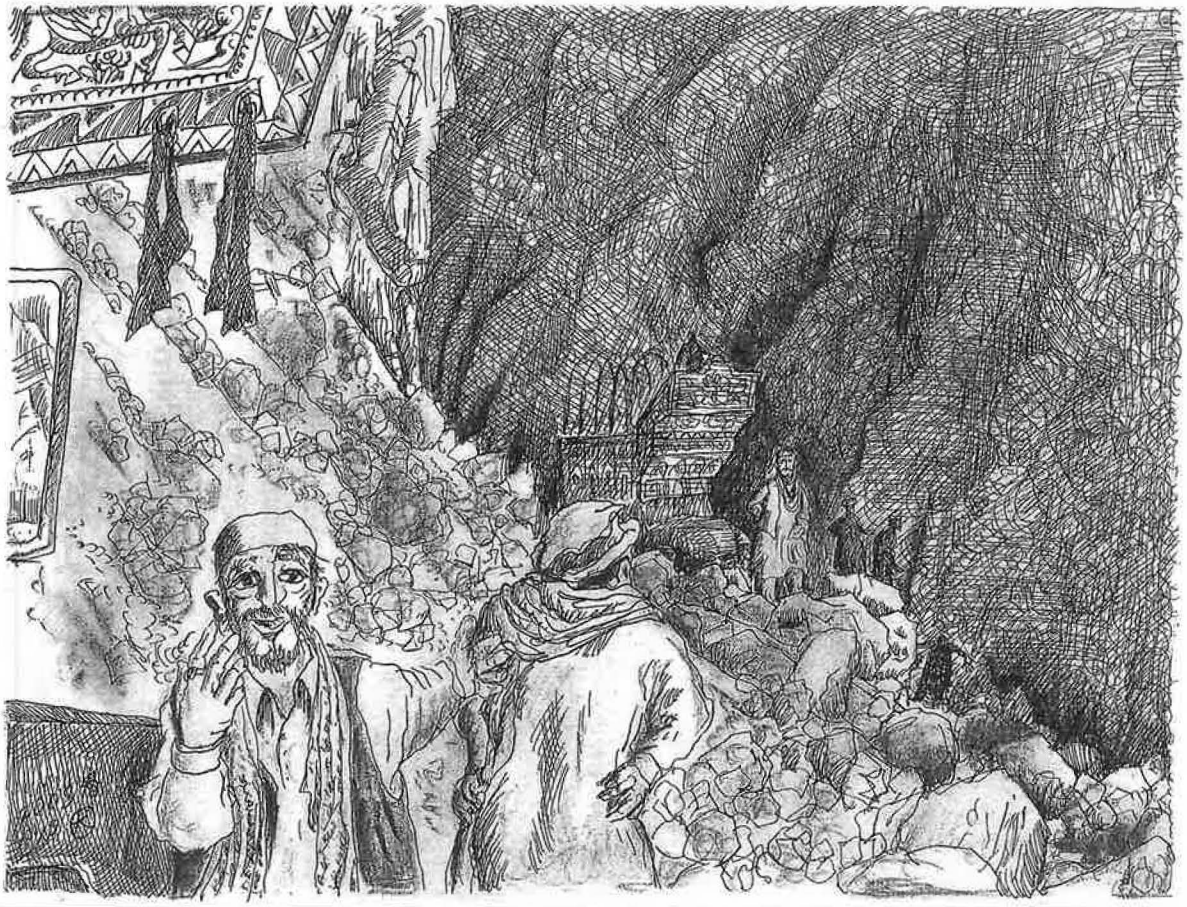
Peshawar-kai
ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092（731）2372
FAX 092（731）2373

No.95
2008年4月1日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵　崖崩れ（画・甲斐大策）

既存の用水路も改修、本水路は沙漠へ到達	中村　哲
◎2007年度農業計画報告――風土、嗜好の制約に逆らわず	伊藤和也・進藤陽一郎・山口敦史・高橋修
技術の限界は自然の力で補う	藤澤文武
非力さを痛感しつつ、医者として力を尽くす	西野恭平
悠久たる山岳の暮らしに思う	杉山大二朗
用水路第二期工事に一時復帰しました	紺野道寛
成長した水路で猛者たちと再会	鈴木祐治
激流と格闘の末、シェイワ取水口が完成	鈴木　学
喧騒を離れ、スタッフと日帰りピクニック	坂尾美智子
ワーカーＯＢ報告⑦信頼を築きながら撮りためた写真	中山博喜

ペシャワール会は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

既存の用水路も改修、本用水路は沙漠へ到達

――地域復興の要、マドラサ建設に協力

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長　中村哲

右肩下がりに進む旱魃

みなさん、お元気でしょうか。

現地情勢は、アフガニスタン・パキスタン共に、まさに修羅場です。空爆、暗殺、反乱、一〇〇年に一度といわれる大旱魃（かんばつ）と飢饉（きえん）、外国軍の横暴、麻薬、強制送還しても減らない難民、述べれば暗い話ばかりです。かつて、「東洋平和のためならば、何で命が惜しかろう」という軍歌がありました。日本中で六十年以上前に歌われました。現在、ここで進行していることは、その拡大版に過ぎません。「世界平和のために」、戦争しようというのです。ただし違うのは、自分の命は惜しいらしく、上空から爆弾を落としたり、未熟な軍隊が恐怖でやみくもに攻撃するので、罪のない犠牲者が増えるばかりです。

政情を語るのは疲れますので、少し元気の出るできごとを伝えましょう。

アフガン大旱魃については常々お伝えしている通りで、今年も最悪です。毎年「最悪だ」を連発していますが、誇張ではなく本当です。つまり、年々常に右肩下がりで進行しているということです。自給自足の農業国で、食料自給率は過去最低、おそらく半分以下に落ちていると関係筋は述べています。今年は特にひどく、東部アフガニスタンで小麦の作付けができぬ農家が多く、食糧は数ヶ月で二倍の値段となりました。WFP（世界食糧計画）も、危機を訴えています。私たちは、農業生産の向上がなければアフガン復興はあり得ないと訴えてきました。今冬は餓死、凍死が各地で発生、分かっているだけで数千人規模に達しています。

用水路完成を急いでいるのは、このためでもあります。その上、治安悪化でいつ「邦人退去」の指示が出るやも知れず、「二年分の予算をつぎ込んでも第二期工事、八・五（第一期工事との総計二一・五）キロメートルを完成せよ」と、こちらも空前の規模で突貫工事が進めています。うち三・五（総計一六・五）キロメートル地点までは既に灌漑（かんがい）が始まり、間（ま）もなく五・八（総計十八・八）キロメートルが完成します。工事の先端は標的であったガンベーリー沙漠に達しました。

ローダーに乗って用水路を渡る中村医師

死のガンベーリー沙漠

この広大な沙漠は、幅五キロメートル、長

さ二十数キロメートルに及び、ニングラハル州とラグマン州の境にあります。旅人が度々死亡するので有名で、現地のことわざで「ガンベーリーのように喉がからからだ」といいます。十八年前、わがPMS（ペシャワール会医療サービス）の職員が殉職した場所でもあります。ここに水が注がれますと、最低でも二千町歩を潤すことになります。折から、パキスタン政府の強制送還政策で、ジャララバード周辺は満足な食さえ満たされぬ帰還難民であふれています。

このような状態の中で、難民生活から突然、以前よりも豊かな水に恵まれる住民の喜びはたとえようがありません。「ガンベーリーの水」は象徴的な響きを与えるでしょう。東部アフガンで恐れられた沙漠が豊かな田園地帯になることを、想像してください。

今冬の渇水は、各地域に大被害を与えました。クナール河沿いの取水口は、のきなみ水が絶え、「一ヶ村でも、二ヶ村でも、ともかく生存を可能に」と、分水路の整備や昔からある取水口の改修も積極的に進めています。最大の工事はベスード用水路（三千町歩）の復活、シェイワ取水口の全面改修です。特にシェイワ用水路（二千町歩）は、現在一〇〇パーセントをPMSのマルワリード用水路（Japan Canal）に依存しており、将来私たちの用水路がガンベーリー沙漠を潤し始めると、既存の用水路へは十分な送水ができなくなります。これまでの五年間の経験と技術の粋を集め、既存の用水路にも長期間使用できる頑丈な堰と取水口が間もなく完成します。既にわがマルワリード用水路から送られる豊かな水量で、農業生産が倍増しましたが、それ以上の恩恵を被ることになります。年々進行する取水量の減少で、末端の分水路には水が行き渡らなかったからです。

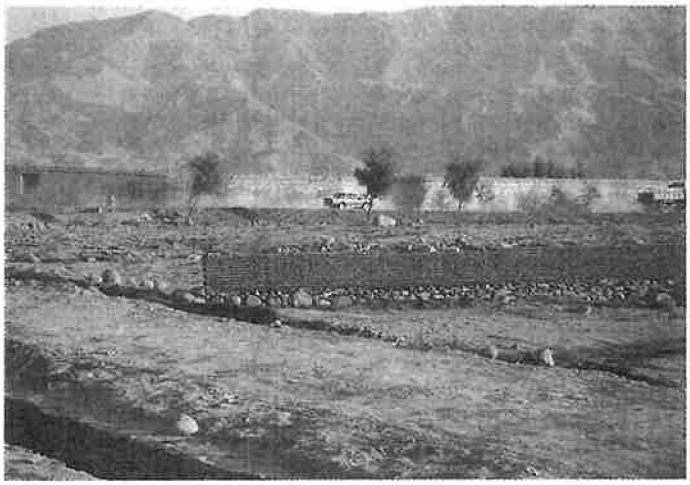
誤解される「マドラサ」

さて、どうしても付け加えなくてはならないのが、「マドラサ」の建設で、現在シェイワ郡に用水路と並行して作られています。マドラサについては、少し説明が要ります。通常、「イスラム神学校」と訳され、「タリバーンの温床」として理解され、外国軍は支援どころか空爆の対象としたほどです。一昨年、国境付近で「八〇名のタリバーンを殺した」と米軍の発表がありました。何のことはない。死んだのは、全て年端もゆかぬ子供たちでした。住民たちの憤激に、後に「誤爆だ」とされましたが、日本では報道で取り上げられませんでした。

実態は、西側筋の伝えるものとかなり異なります。マドラサは、地域共同体の中心と言えるもので、これなしにイスラム社会は成り立ちません。イスラム僧を育成するだけでなく、図書館や寮を備え、恵まれない孤児や貧困家庭の子供に教育の機会を与えます。アフガニスタンがこれほどひどい状態なのに、いわゆる「ストリート・チルドレン」が少ない理由の一つがマドラサの存在でしょう。

また、マドラサはモスクを併設し、「ジュンマ・プレイヤー（金曜礼拝）」に、地域全体の家長らが集まります。地域にとって大切な知らせや協議、敵との和解などは、ここで行われます。何も「テロリストの温床」ではなく、政治性がある訳ではありません。ここで学ぶ学童を「タリブ」と呼び、複数形が「タリバーン（神学生）」です。コーランの学習だけでなく、地理や数学などの一般教科も教えます。つまり、地域の文化センターであり、恵まれぬ子供たちの福祉機関であり、人々が協力する場所であり、地域を束ねる要なのです。運営は地域あげて行い、時々アフガン政府からの援助があるといいます。

その重要性がどれほど人々にとって大きいか、改めて認識を新たにしました。昨年、用水路の第一期工事十三キロメートルが開通したとき、近くに一万四千平方メートルの大きな空き地がありました。マドラサの建設予定地だそうです。村人に尋ねると、「作りたいが、この貧困な状態で誰もできない。国際支援団体は、マドラサとモスクの建設だけは援助項目から外している」との話でした。州の



マドラサの建設予定地

教育大臣は、「マドラサなくして地域の安定はない。共同体に不可欠の要素なのに、政治勢力の『タリバーン』という名前だけが誤解を与え、誰も協力したがらない」と溜息をつきました。

「これで自由になった！」

幸い、当方は水路工事の真っ最中、資機材は豊富にあったので、「誰も怖がって作らないなら、当方が建設だけ、ついでにしましょう」と申し出ました。ジャララバードの町には、物乞いをする子供が増え、千名以上の孤児たちがいると言います。その子たちを吸収できる福祉機能に注目したからです。

ところが驚きました。住民たちも地方政府も、沙漠化した土地に水が注がれた時以上に、喜んだのです。着工式には近隣の村長たちが顔をそろえ、中には「これで自由になった！」と叫ぶ長老たちもいました。はて、「自由とデモクラシー」の「自由」とは何だろうと、考えさせられました。彼らには宗教心の篤さと共に、伝統や文化に対する強い誇りがあります。それが否定されるような動きに、抑圧感を覚えていたのでしょう。

図らずも、サウジアラビアを除けば、外国人によるマドラサの建設支援は初めてだそうで、大きな朗報としてアフガン東部一帯で話題となりました。「マドラサは公徳心を教える。これでぐれた若者やならず者が減る」という人もいました。「やはり、日本だけは分かってくれる。兵隊も送らない」と、日本国に対する大きな賞賛、悪い気はしませんでした。眉をひそめた西側の国際団体もあったでしょうが、アフガン人の殆どが狂喜したのです。

「人はパンのみにて生きる者に非ず」。

単なる理想や教説ではありません。かつて謙虚に天命に帰した日本人のはしくれとして、人間の事実を知ったのは幸いでした。

仕事は山場を迎えています。日本にあって物心共に祈りと希望を以って協力してくださる皆さんに感謝します。

中村哲（なかむらてつ）
九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十三年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手、〇七年三月第一期工事完成。年間診療数約八万人（二〇〇六年度）。

◎二〇〇七年度・農業計画報告

風土、嗜好の制約に逆らわず

――悪戦苦闘のお茶、いよいよ製茶段階へ

農業計画現地担当　伊藤和也・進藤陽一郎・山口敦史　農業指導員　高橋　修

長く厳しかった冬も過ぎ、皆さんも春爛漫の季節をエンジョイされていることと思います。農業計画も平成一四年の春三月にスタートしてからちょうど丸六年経ちました。あっという間に過ぎたような感じがしています。農業計画全体の状況については次号に譲り、今回はいくつかの苦労話をお届けします。

芋の上にも三年

最初は、現地で人気者になっている「サチュマイモ」成功の裏話です。

一年目は、日本から種芋に付けて持ち込んだ（らしい）黒斑病で苦くて食べられない芋が多く、二年目は、掘った芋のほとんどがコガネムシに囓られ、立ち上がり早々二年続きの大ショックを受けました。

二年目・三年目の冬は種芋貯蔵のトラブルです。種芋は地面に掘った縦穴に保存していますが、「おい、寒いだろう」と手をかけ過ぎたために縦穴内の温度が高くなって腐敗・発芽を起こしました。逆に「蒸せるだろう」と風通しをし過ぎて低温になったためにたくさん腐り芋が出ました。全滅しなかったので助かりましたが、貯蔵の勘所をつかむまでに二年かかったことになります。

これで「成功」と思っていた矢先、三年目の夏、八月の暑い盛りに突然大粒の雹が降り注ぎ、順調に生育していた茎と葉がボロボロになるというハプニングに見舞われました。

四年目に当たる昨年は、数々の失敗を教訓として種芋の保存も苗床への伏せ込みも、また栽培技術もおおよそ勘所をつかんで成功し、周辺農家に大々的に苗を普及できるところまできました。「石の上にも三年」ではなく、「芋の上にも三年」といった感じです。今年も多くの農家から苗の配布希望が届いています。

気温の変化に一喜一憂

今年、二月二七日の毎日新聞の夕刊に、「アフガン寒波 死者一一〇〇人」というショッキングな記事がでていました。内容は「氷点下三〇度・テント暮らしで暖取れず」と生々しく現地の実態を伝えています。

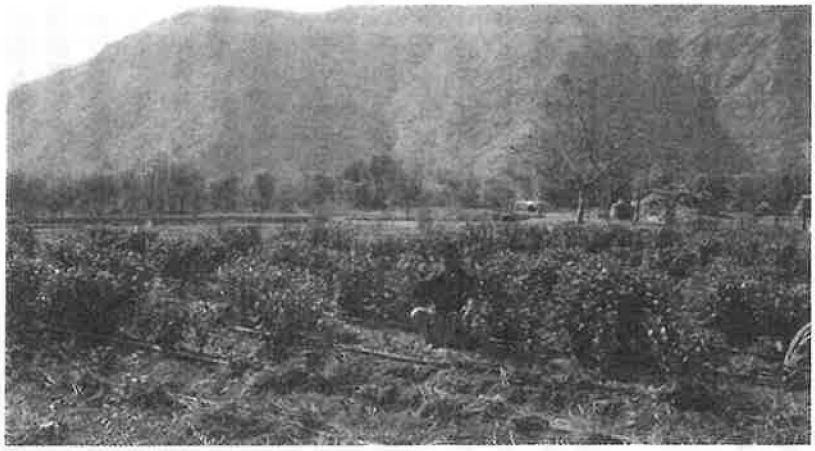
もともとアフガニスタンは日本とは段違いに気象変化の激しい国で、毎年のように気象のパターンが変わってきます。例えば一月の最低気温の平均は、去年四・三℃でしたが、今年は一・七℃で時には〇℃まで下がる夜もあってエン麦などが被害を受けました。一方作物は、人間と同じように「生きもの」ですが、困ったことに「暑い」とも「寒い」とも、また「喉が渇いた」とも喋ってくれません。

それで私たちは、毎日畑を見回りながら作物の状態を観察し、時には根を掘り起こして調べ、「暑いか」「寒くないか」「水が欲しいか」などを問いかけるようにして作物のご機嫌を伺い、またその手当に神経を使っています。

農業計画に立ちはだかる牛・鳥そして人？

バルコートの茶園では、小麦・玉蜀黍の刈り取り後になると放牧している牛が毎年、柵を壊して侵入し、大切なお茶の株を食い荒らします。「人間様より先にお茶をたしなむ（？）とは怪しからん」とボヤきながら、結局畑の周囲を金網で囲うことで決着をみました。

ブディアライの採種用ソルゴーは、毎年夏



ダラエ・ヌールの試験農場。ようやくお茶畑らしくなってきた

から秋にかけての採種時期に飢えた鳥の大群が種を食い荒らしにやってきます。空からの襲撃には我々もお手上げで、結局、鳥様が半分、人間様が半分種子を分け合うということで諦めております。

またブディアライで試作しているブドウは、周辺のガキ（子供）どもがまだ熟してもいないうちから盗み食いに侵入し、二年続けて待望の実を全滅させられました。まだ熟してもいない渋くて酸っぱいうちからこれだけの「大人気」なのですから、ちゃんと熟した実を届けることができたらさぞかし周辺の人々に好評であろうと思っております。

苦闘・試行錯誤が続くお茶の栽培

お茶は、土のpH（ペーハ＝酸度）が四・五～六・五でないと育たない作物です。ところが現地の畑はpH七・五～八・〇で、硫黄華、酸性肥料、硫化アルミニウムを使ってpHを調整していますが、なにしろ灌漑用水のpHが八・〇近くありますので思うように下がってくれず、現在もなお悪戦苦闘を続けています。

またお茶は、夏の高温と強い日差しに弱い作物です。このためお茶の畦と畦の間にソルゴーを播いて遮光し、今年は新たに畦間に杏を植えて日陰を作りますので、この方は対策の目途がついたと思っています。

今年の春はようやく本格的な茶摘みができる見込みです。しかし現地の人達が好むお茶は、渋みがなく、色は黄緑色、香りも少なく、味もない、そんなお茶で、日本のようなお茶は現地の味覚にはなじまず本当に驚きました。それで過去二年、手探りで試作してきた結果、現地の人達が好む製茶のコツが分かってきましたので、今年は是非成功してお茶好きの、現地の人の喉を潤したいと楽しみにしています。

時間がかかるのが悩み

現地の農家は実際とても現実的で、ただの目新しいだけの作物・技術は、結局は根付きません。現地の農家から、「おいしい」「収量が多い」「やり方が簡単だ」といった評価を受けて初めて一歩踏み出すことができるのです。

私たちの農業計画では「お金を使わない」故の苦労というものはありません。むしろ「お金を使わない」からこそ逆に現地に合った方法を見つけることができ、その結果として一戸一戸着実に実践農家を増やしていくことになるからです。ただ十分な栽培試験が必要なために、また一年一作という農業の性質上、時間がかかるのが悩みのタネです。

以上は苦労話の一例ですが、時間をかけ、苦闘・試行錯誤を続けてきた農業計画の活動の結果が、やっと現地の農家の手に届けられるようになりました。今後とも私たちの活動に対するご理解とご支援をよろしくお願いします。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

＊ワーカー通信

技術の限界は自然の力で補う

灌漑用水路建設・植樹担当　藤澤文武

厳冬から一気に初夏へ

つい最近まで鼻水が凍ってしまうような寒さの日々から一転、今は汗が吹き出るほどの初夏のような暑い陽気となりました。ペシャワール会会員の皆様はじめまして、藤澤と申します。この度、去年の八月に現地入りし、一ヶ月を灌漑用水路の仕事を少々、その後転属して約半年弱の期間を植樹班担当としてやらせていただいています。

今現在の植樹班は三人です。うち一人は自分、もう二人は現地スタッフのアジマール・ジャン（若いにーちゃん）と、アルサラ・ハン（コロっとしたオジサン）の三人で仕事を行っています。このうち、アジマールさんは農業大学出のため、草木に関して広い知識があり、樹木などに対して何か問題があるとき、対処法も踏まえて解り良く教えてくれるため非常に頼りになります。アルサラおじさんの方は、もともと植樹班のチームでしたが、以前まで班を離れて他の水路現場監督として行動していました。その後前任の山口さんがダラエヌールの農業班へ転属されたことをきっかけに、人手不足ということで再び戻っていただきました。何かと至らぬところが多い私ですが、彼らに支えられる事で仕事が成り立っているのであります。感謝であります。

自然でできることは自然で対応

さて、ここでひとつ自分に疑問が浮かび上がりました。それはずばり、

「植樹班とは何か？」

これはもう言ってしまえば、木を植える班です（そのまんまですね）。当の名目としては、植樹をすることで灌漑用水路の護岸、水路の決壊などを保護すること（土手の法止め等）が名目であり、簡単に訳せば木を植えることで水路を末永く守ってもらうことだと認知しております。簡単に説明してしまいましたが、「水路を末永く守ってもらう」、ここが重要なポイントです。そこで少し例を挙げてみます。

用水路にはさまざまな樹木が植えられていますが、その中でもＰＭＳでもっともポピュラーでもっとも多く植えられているのが柳です。柳は主に水路沿いの蛇籠の上部に挿し木で植えます。蛇籠は中に大量の平たい石が敷き詰められていて、それを囲み強固にするのが役目です。しかし蛇籠で使われるワイヤーは金属製であり、いずれは酸化して役目を終えます。そしてその時こそ、柳の出番であります。柳の根は細かく伸びて石と石の隙間を行き、いずれその根が蛇籠の石全体に行き渡れば、それが蛇籠のワイヤーの代わりとなります。そして籠が果てた後も、その役目は引き継がれて、こうして水路を末長く守ってもらう。これが植樹班のポイントのひとつであります。以上を踏まえて考えると、自分はある言葉に行き着きます。

それは、

「何事も自然でできることは自然で対応する」。

これは中村先生の言葉・方針であります。木には農薬や殺虫剤の類は一切使いません。天敵（自然）にまかせるのです。ですのでこの言葉で植樹班の全てが当てはまるような気がします。用水路を自然な形にする。これが植樹班の役割だと私は思います。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

非力さを痛感しつつ、医者として力を尽くす

ダラエ・ヌール診療所、医師　西野恭平

来院するだけで一大旅行!?

お久しぶりです。ダラエ・ヌール診療所の西野です。

昨年の六月からダラエ・ヌール診療所で活動を始め、一年弱が過ぎました。活動を始めた当初は自分自身が体調を崩すことも度々ありましたが、何とか生きています。

この一年弱を通して、ここで生活をする人たちは一年中何らかの病気と闘い続けなければならない、ということを強く感じました。春～夏は下痢、マラリア、秋には悪性マラリア、そして冬は肺炎、気管支喘息。それに加え、季節に関係なく栄養失調や結核。住居環境が整っておらず、自然と共存せざるを得ないこの地域では、季節の移り変わりとともに途上国の主な死亡原因全てと向かい合わなければならないことになります。毎日のように喧嘩をしている元気過ぎるスタッフの強さの秘密は、厳しい環境を生き抜いてきたからこそだと思いました。

夏、熱帯地方特有の熱帯病に医者としても自分自身が患者としても苦労したことが嘘のように、冬は雪が降るような寒さになりました。そして、寒さが厳しくなるにつれ患者の数は急増し、遠隔地からは観光旅行かのような大集団で来院、お土産に診療所特産の薬、といった光景も見られます。ただ、そんな賑やかな光景も雨や雪など天候不良の日には患者は激減し、特に遠隔地からの患者はほとんど見られず、診療所に来ることそれ自体がとても大変なことだということを改めて感じさせられました。

自分自身、風呂は湯の出ない時間が多いため、連日の一人寒中水泳大会、夜は帽子＋マフラー＋ジャンパー＋ズボン二枚おまけに毛布四枚と窒息死目的のダルマのように寝る度に、日本の温泉と電気毛布を恋しく思い、自分の生まれ育った国が地球上で恵まれた位置にあったこと、そしてそれは本当に運が良かっただけだということを強く感じました。

「家族はただ見ているしかない」

去年の十月上旬、パキスタン北部にあるラシュト診療所に短期間ではありましたが滞在した際、現地スタッフから「冬は病気になったら家族はただ見ているしかない。何もすることはできない」という話を聞きました。その話を聞いた際は、それだったらいつかは自分が、と意気に感じましたが、自然の寒さの厳しさを身に染みて感じ、十月上旬でさえ雪が舞い散る寒さだったラシュト診療所の本格的な冬を想像すると、いつかは誰かが、とかなりトーンダウンしてしまいました。考えることと実行することの違い、そしてやり続けることの困難さを自分の弱さと共に痛感しています。

今年こそは何とか……

ダラエ・ヌールは二月下旬ごろより急激に暖かくなり、徐々にマラリアや下痢の患者が増えてきています。寒い冬は早く終わってもらいたい、でも、暑すぎる夏は来てほしくない、とラシュトだけでなくダラエ・ヌールでも限りなく逃げ腰の情けない自分に気づきつつも、去年の夏、何度も悔しい思いをした栄養失調や下痢が止まらずに亡くなってしまった子どもたちを思い、今年こそは何とか出来ないかと思っています。

ダラエ・ヌールに来て、十分な施設や薬がない中では医療や医者がとても小さな存在に感じたことが多々ありましたが、それでもこの診療所を頼りにしてくれている多くの人たちの為にもスタッフ一同これからも力を合わせてやっていきたいと思います。

悠久たる山岳の暮らしに思う

ダラエヌール診療所事務　杉山大二朗

ワマから七時間歩いてきた患者

現地で活動を始めて三年が経過してしまった。

名誉なこと（？）に私の持ち場は水路現場、ジャララバード事務所、ペシャワール基地病院、そして去年の冬からダラエヌール診療所で働き始めており、主に診察券の発給が私の今の仕事だ。

そんなある日の朝、診察券の手配を済ませていると、高齢の男性患者二人が診療所に訪れてきた。診療所内も患者で溢れていたが、彼らの姿格好は峡谷内の村人と服装も微妙に違っており、すぐに目立つ。

その**矍鑠**とした物腰も堂に入っており、歌舞伎「勧進帳」の弁慶を**髣髴**とさせた。どこから来たのかと訊くと、シンゾーという、ダラエ・ワマの近くの深山幽谷分け入った遠い部落から、七時間ほど歩き通しでこの診療所まで来たという。周りの患者もそれを聞いて騒ぎ始め、まるで異星人を取り巻くように色々と質問しているのを見ると、現地住民ですら珍しいようだ。昼食時に彼らのことが話題になり、気になる診断結果をスタッフに尋ねると、二人とも「Pyrosis（Heartburn）」→単なる胸焼けだった。

後日、この患者のことを中村医師に話すと「彼らにとっては健康診断のようなもんよ」と仰っていたが、山岳地域を歩いて回る彼らは常に健康な体躯を維持できるのだろう。彼らの暮らしぶりは中村医師の著書『ダラエ・ヌールへの道』（石風社刊）で詳細が書かれているので省略する。

観念に縛られる現代人

二一世紀の現在、アフガンの山奥では貨幣経済の波に影響を受けず、自給自足の暮らしを続ける**長閑**な部落があることに驚く。事も無げに七時間も歩いて下山してきたという彼らの悠久とした時間の感覚を、文明社会に汚染された我らには持ち得ないかもしれない。**兎角**、現代人は自然に対する**畏**れが希薄になってはいないだろうか。自分の思い通りにならなければ思い悩み苦悶するが、自然に対する謙虚な畏れがないばかりに調和や寛容という知恵を**蔑ろ**にしているように知覚される。

その一つが時間の捉え方だろう。日本でも明治期からグレゴリオ（太陽）暦が導入されて、それまでの陰暦の慣習が一変してしまった。特に農業や漁業といった季節や月の満ち欠けに左右される仕事に従事する者は、さぞや戸惑っただろう。「多分」「恐らくは」という大らかで含蓄に富んだ言葉は忌み嫌われ、正確精密さが求められる社会は、歪で窮屈極まりない。所詮は人間が作り出した道具に過ぎない時間という概念に、人間が翻弄されては本末転倒だ。そして人として矜持に支えられた豊饒な精神までも蝕みかねない。だから私は山岳民族に敬意を表し、腕時計や目覚まし時計を捨てて、大いなる自然の流れに身を委ねるのだ。

ドン、ドン！「こらー！　ダイさん！　起きろ！　もう朝礼始まってんぞー！」

は、しまった。また寝坊して遅刻だ……。珍しく良いこと言ったなと思ったら夢だったか。朝礼に出ると現地スタッフたちがニヤニヤしている。澄まして「いいかい、君たち。時計なんかはだネ……」といつもの口上が始まる。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

用水路第二期工事に一時復帰しました

灌漑用水路建設担当　紺野道寛

石を叩き、農地候補を測量

もう越えることは無い、と思っていたカイバル峠を越えて丸三ヶ月が高速に過ぎ去りました。私は、現在用水路現場で測量の仕事をしています。主な現場は、用水路が行き着くであろうQ地区という所でカナルの最先端です。Q地区はガンベーリー砂漠の一端にあります。その為に砂埃は勿論のことで、砂嵐や強風に見舞われることもしばしばです。そんな所を、測量助手の少年レイバー（作業員）とあちこち歩き回っています。測量の仕事は、基準となる標高を移していくことが仕事の一つなので、動かない固い石の尖った所を見つけて標高を移します。

そんな訳で、毎日カツカツドンドンと石を叩き回るのがメインの仕事だったりもします。単に高い低いを探すのではなく、「農業が出来る土の所に流せるように」という中村先生の言葉どおりになるように……と思いつつ。

「また力になれるなら」

このガンベーリー地区にいると、青い空、一面の索漠とした土地、彼方に見える地平線、強い陽射しで歪んで見える遠景、むき出しの山々、悠々と移動中の遊牧民、何処からともなく見物に現れる住民……などを目にして、自分が今アフガニスタンにいるのが夢のように感じます。私は、二〇〇三年七月から二〇〇六年一〇月まで、主にダラエヌール診療所の連絡員等として活動させてもらいました。その後は、日本には落ち着かず漂泊のままに暢気かつ気儘に過ごしていました。

そんな昨秋、ペシャワールの藤田さんから「突貫工事のお誘い」のメールを受け取り、「また何か力になれるなら」と今に至ります。また懐かしい顔ぶれと再会できるとは。人生何がどうなるか分からなく、おもしろいなとしみじみ思います。

そんな訳で、一年振りのアフガンですが、治安の悪化や旱魃の進行を強く感じる日々です。それでも、変わらずに頑張っている中村先生をはじめとする愉快で個性的な長期ワーカー、飄々と明るく働くアフガン人スタッフ、会う度に気楽に挨拶してくれる住民達に囲まれ、元気に過ごしています。それも日本で支援して下さる人たちがいるから、ということを忘れないようにします。それでは自分のできることを頑張ります。

成長した水路で猛者たちと再会

灌漑用水路建設担当　鈴木祐治

柳の成長に驚く

皆様、お元気でしょうか。

私は二〇〇三年六月から二〇〇五年九月までの期間、医療事務、物品購入、用水路現場にて仕事をさせていただいておりましたが、急遽、昨年の十一月に現地からの水路現場の突貫工事への召集を請けて、少しでもお役に立てればと思い、短期間ではありますが、二年ぶりに再び現地にて仕事をさせていただくこととなりました。

およそ二年半ぶりに水路現場を訪れ、PMSの用水路の取水口から順に歩いて見て回っていったのですが、まず初めに驚かされたのは用水路の護岸に植えられている柳が、以前は私の背丈よりも遥かに小さかったのですが、

いまでは頭上を遥かに超えて見上げるほどの高さまでに青々と見事に成長していたこと、また、以前は一面茶褐色だった土地に無数の家屋と畑が広がっていたことは、とても嬉しい驚きでした。

水路沿いをしばらく歩いていると、見覚えのある顔も無い顔も、私のことを覚えていてくれている様子で声をかけてきてくれ、会って早々、皆の第一声は、「やあ、私へのお土産はなんだ？」、「もう結婚はしたのか？」「おい、お茶を飲んでいけ」、「それでは、ナンを食べていけ」、「さあさあ、今日はとりあえずうちに泊まっていけ」と、相変わらずな質問攻めに苦笑し、「あぁ、ここはアフガニスタンなんだなぁ」と、ようやく実感をし、水不足、小麦の異常な高騰（一時期は五〇キログラムで二千ルピー＝約四千円）、不安定な政情下の中でも元気そうな姿を見てひとまず安心しました。

完成したシェイワ用水路の取水口

急務の取水口改修現場に配属

現地では水路現場にて中村医師、鈴木学氏の下、土砂の堆積による河道の変動と冬の異常底水位により取水ができなくなったシェイワ用水路の取水口の改修工事にあたらせていただくこととなりました。

三月の増水時期までに完成ができなければ、来年の冬まで持ち越しになるため、限られた時間内の工事となりました。

ちょうど四年前の冬に三ヶ月ほどの間、水路現場で仕事をさせていただいていた時には、この周辺には豊富な水が流れていたのをうろ覚えにも記憶していたので、取水口から対岸まで歩いていけるほどに水が無い状態には正直驚かされました。

シェイワ取水口の現場では、日に四〇人～五〇人のレイバーたちと蛇籠の石組み、コンクリート打ちの作業に当たっているのですが、彼らとの仕事のやりとりの中で面白いのが、小さな子供から白ヒゲのお爺さんまで皆、「自分は誰よりもタクラ（たくましい、頑強）だ」と思っており、大抵のことでは「出来ない」とは言わず、どんなに疲れていても、「私はタクラだから大丈夫」と答えてくれる頼もしい猛者たちです。

特にきつい力仕事がある時には、「この中で誰が一番タクラだ！」と問い掛けると、皆我先に手を上げ、初めの頃は率先して引き受けてくれていたのですが、最近ではどうやら本当にきついのか、皆顔を見合わせて誰よりも遅く手を上げようとするようになってしまいました。

しかしそれでも音を上げずに、晴れた日も、雨の日も、砂嵐の日も、懸命にスコップを握り、石を砕いては運び、一輪車を押し、こんなタクラな人々と共に、日々増水するクナール河に追われながら、現在も休日返上で突貫工事が進められています。

また今回の水路工事の現場では、四年前の冬の突貫工事の時に共に働いた、とてつもなくタクラなレイバー達とまた一緒に、怒り怒られ、笑い、助け合い、泥まみれになって働く機会に恵まれ、何かとても不思議な縁を感じています。

様々な苦境の中でも素朴にも懸命に生きるタクラな人々への、これからも変わらぬご理解とご支援を心よりお願い申し上げます。

激流と格闘の末、シェイワ取水口が完成

灌漑用水路建設担当　鈴木　学

クナール河の増水がリミット

三月七日。こちらに来て早三ヶ月が過ぎた。今日は金曜日だが（アフガンでは休日）いつもどおり午前中は現場のシェイワ水路取水口で作業を進める。コンクリート打ちには不向きであっても二ヶ月ぶりの雨にほっとする。昨日今日で水路沿いの柳がいっせいに芽吹いた。

ジェリババのPMS取水口第一次通水からちょうど四年。PMS本水路はガンベーリー沙漠を目前に二〇キロメートル近く伸びているが、約六キロ下流にあり、シェイワ郡一帯を古くから潤してきたシェイワ水路の取水口は他の水路同様、冬季の取水ができない。現在PMSの水路の水がこの地域一帯の灌漑を一手に引き受けており、このままシェイワ水路が使えない状態だと、PMS水路の水がガンベーリー沙漠に十分送水できないことになりうる。

クナール河の水位が下がるこの時期、中村先生が遠のいた河道の修復と堰の造成にあたり、自分は緊急に日本から呼ばれて四年ぶりの取水口工事となった。クナール河は相変わらずのあばれっぷりで、二月中旬から徐々に増水し、三月に入って急激に水位を上げているが、四年前も取水口対岸工事を手伝ってくれた鈴木祐治君が一緒に日本から来てくれ、おかげで取水口は完成して現在は第二水門と水道橋の造成を急ピッチで進めている。

シェイワ取水口はカンレイ村の大きな岩山のすぐ脇に位置しており、この岩山は大昔にアングレーズ（イギリス人）が掘ったと言い伝えられる、深くくり貫かれた縦穴が二つ存在する。中村先生も宮殿か何かを造ろうとしたのではないかとおっしゃっており、とにかく古くから人がいたことは確かである。それよりもずっと長い年月この大岩はクナール河の激流を受け止めて直角に受け流しているため、流れの当たる先端部は船の舳先のようにとがった形をしている。

地元民、日本人が一丸となって

昨年河道が変わって水がこなくなった河原を一・五キロ上流から二〇メートル幅で掘削して、河道を元に戻し、舳先によって受け流されたクナール河の水を大岩と川とが接する最後の部分で一メートル堰上げて堰板方式の取水口から取り込もうというのが中村先生の計画である。取水口に関する中村先生の主な指示は以下の通り。

・基本構造はPMS取水口と同じ。ただ砂の堆積をより少なくするため、上流側蛇籠ピラミッドの角度を急勾配にして川から堰板までの距離を短かくとる。

・下流側は蛇籠を垂直にしてそのすぐ下に井戸のチャックを利用して急勾配の砂排出用ドレインを設置する。

・取り入れ口は二門で一門の内径は一・六メートル。中央の柱および取水口内壁を流線型にし、水の抵抗を極力減らすこと。

筑後川、山田堰のくり貫き関門とはいかないが、カンレイ村大岩と一体化したシンプルだが非常に強固な取水口になったと思う。中村先生の水抜き直角堰と、ヤール・モハマッドの対岸蛇籠護岸が見事である。

長期ワーカー時代同様、毎日休みなしで一生懸命働いてくれたカンレイ村のスキル・レイバー（技術者）と左官の皆さん。彼らの多大な協力なしにこの地でこの工期で難しい取水口造成工事をやり抜くことはできませんでした。ここに記して感謝の意を表したいと思います。

最後になりましたが、中村先生をはじめ、藤田さん、芹沢さん、スタッフの方々。特に最初の年同様、宿泊することとなったダラエヌールの伊藤さん、進藤さん、そして日本から一緒に来ていただいた鈴木祐治君。本当にほんとうにお世話になりました。ご協力いただいたすべての方、どうもありがとうございました。

◎PMS歳時記

喧騒を離れ、スタッフと日帰りピクニック

PMS本院臨床検査技師　坂尾美智子

にぎやかなバス道中

ラマダン（断食）月を半月後に控えた昨年八月三〇日、病院では外来を休診にして、タルベラ地方への日帰りピクニックがありました。

大型バスを借り切り（運転手付き、ガソリン病院持ちで五千ルピー、約一万円）、当番の職員を残し四〇名弱で行ってきました。女性は私を入れて三名です。ピクニックだけど……、現地の女性二人は、職場には着てこない、イード（ラマダン明けの祝祭）かと思う美しいシャルワーズカミーズを着ていました。バスの中では、女性三名は前方にかたまり、私は一番前の見晴らしの良い席に座りました。キョロキョロせずに外の光景を見ることができ幸いでした。

バスは派手なきらきら物で飾られ、おまけに運転助手の青年はギンギンガンガンとパキスタンミュージックをかけまくります。安全運転のための職務に専念して戴きたいのですが、音楽が鳴ればバスの通路で踊りだす職員もおり、やはり音楽も重要な仕事であったのでしょう。ふと気づけば私も膝の上で拍子をとっており、青年の心意気が乗り移っていました。

出発後すぐに二種類の駄菓子袋が後方より回ってきました。こちらのお菓子はスパイシーなもの、甘物に大別されます。これはどうもスパイシーらしい、喉が渇く、トイレが心配、ということで手を出しませんでした。

しかし、途中でちゃんとティータイム兼トイレ休憩もとってくれました。チャイハナ（喫茶店）の屋内にはカーテンを廻らした部屋が用意され女性三名はそこで、男性職員は野外で一杯六ルピーのミルクティーと持ち込んだケーキを戴きました。現地のスタッフにはたぶん滅多に口にしないであろうホールケーキ（一皿二二五ルピーを四個）にピクニック気分はどんどん上昇していきます。

雄大なインダス川沿いの休憩所で昼食です。病院のスタッフが用意したフルーツサラダ、ナン、ランチボックス、りんご、ペプシという豪華メニューです。昼食後は川に足を浸したり、釣りの真似事をする者あり。ただこの美しい水面を眺めるだけでも、埃っぽいペシャワールから来た甲斐があります。

ピクニックの出発を笑顔で待つPMSスタッフ

雪解けの川で水浴びする男性スタッフ

その後近くのガジバロタダムの傍に場所を移しました。朝晩はかなり涼しくなりましたが日中の日差しは厳しく、川べりでは人に混じり、牛や車が水浴びをしています。

勇気あるスタッフの一人がカミーズ（上着）を脱いで水の中に入っていくと、男性職員は次々とカミーズを脱ぎ、シャルワーズだけで水の中に入っていきました。シャルワーズはびしょびしょになってもすぐ乾いてしまいます。女性はここでも足を浸すだけですが、雪解け水なのでかなりの冷たさです。水に入ったスタッフの一人は翌日お腹を壊したといっていました。最初から最後まで浸かっていたN氏は、翌日はアフガンの用水路のための麻袋の買い付けで遅くまで頑張っていました。えらい！

日ごろは外出は極力控え、通勤途上の店で日用品を買うぐらいが外の空気に触れるほぼ全てという現況です。違う光景を眺められただけでもありがたいのに、湖かと思えるような大河のきれいな水に触れ、すっかり満足した私は、帰りのバスではうつらうつらしていましたが、時々歓声、嬌声、罵声が上がります。後ろを向けば、ペットボトルで殴り合い、丸めた新聞紙が飛び交い、踊り出す、小レモンは飛んで来る、昔の修学旅行の枕投げ状況が発生していました。

バスの窓は鋭い日差しを避け冷房効果をあげるため、分厚いカーテンがびっしりと掛かっています。外から見れば陰気臭いバスでしょうが、内はこんなに陽気だったんですね。

一路ペシャワールに直行かと思いきや、途中で公園に立ち寄りクリケットゲームをする予定もあったようです。残念ながら、現在はクリケット禁止ということで、少し散策してペシャワールに戻ってきました。

一〇時間の日帰り旅行は、充実・満足・満腹・楽しいピクニックとなりました。パワフル、疲れ知らずの職員にただただ感心した一日でもありました。

ピクニックを企画してくださった方々、当日残って仕事をしていた職員、良い場所を選んでくださった事務長さん、前日・当日世話役をしてくれた職員、皆さんに感謝感謝です。

▼未使用の切手、ハガキを！

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

アリアナ大地の心――10

勲章

甲斐大策

九二年夏、私はスレイマン山地を転々としていた。傍には私を警護するアリ・ヘル族の若者が影のように添っていた。十代後半を旧ソ連軍との戦いに過した寡黙な戦士である。

色も香りもラヴェンダーに似た野草の群落に二人並んで腰を下ろし、異部族の土地を渡り歩く緊張から解放されたひとときを過した。行きますか、と立ち上った若者のペヘランの裾にとげ草がついていた。手を伸ばす私に、メラバァニと礼をいい、ややはにかんで、これは司令官が買ってくれました、という。着たきりの化繊の上下が、ガルデズでの激戦の後に得た唯一の報賞だったのである。

この時私は、さる戦国大名直系の人物との問答を想い出してしまった。戦国の世そして泰平の世の何百年、功ある者へ下賜した品々の量や費用は大変なものだったのでは、と問う私に、旧華族の老人は平然と答えた。そのための安い物が常備してあったようですな、と旧平民の不躾けな質問を、いささかも意に介する風ではなかった。

この数世紀、西欧とそれに倣った君主や国家は、諸々の目的にそう功労者に勲章（英語でデコレーションという）を授けてきた。

敗戦直後の大連に現れた旧ソ連軍将官の胸に無数の勲章が列んでいた一方で、旧日本陸軍将校や憲兵は勲章と軍服を捨て、民衆に紛れようとした。私たち少年の心にあった勲章は輝きを失った。

一片のメダルや七宝細工が、戦いに赴いた民衆に誉褒をまとわせ、遺族を慰撫してきた。そこに毫末でも戦いの真実と愚かさを無辜の民から遠ざける意図があるなら、勲章とは、権力の最も卑しい詭詐のひとつ、と思わざるを得ない。

形而上世界に信をおくイスラム戦士の世界に勲章の授受はない。もしかするとそれは、定住し切った社会にのみ生きる現世的な慣習なのかも知れない。私があのアリ・ヘル族の若者に報いた物は、双眼鏡と小型ラジオだけだった。生命を懸けて私を補佐していた若者に、充分に報いたとは思えない悔いが今も、私の中に居坐ったままである。

●ワーカーOB報告⑦

信頼を築きながら撮りためた写真

元・PMS本院事務（現在京都府在住）
中山博喜

先日、大阪で写真展を開いた。

現地活動に参加させてもらっていた間、暇を見つけてはちょくちょく写真を撮っていた。「ちょくちょく」とは言っても五年間撮り続けたわけだから、使用したフィルムもそれなりの量になっていて、結局それをまとめるのに二年ほど掛かってしまった。

どのカットを紙に焼き付けようかとフィルムを物色していたところ、私が現地で最初に撮ったネガを発見した。「……おお」などと唸りつつ、このカットを撮るのにずいぶん時間が掛かったことを思い出した。

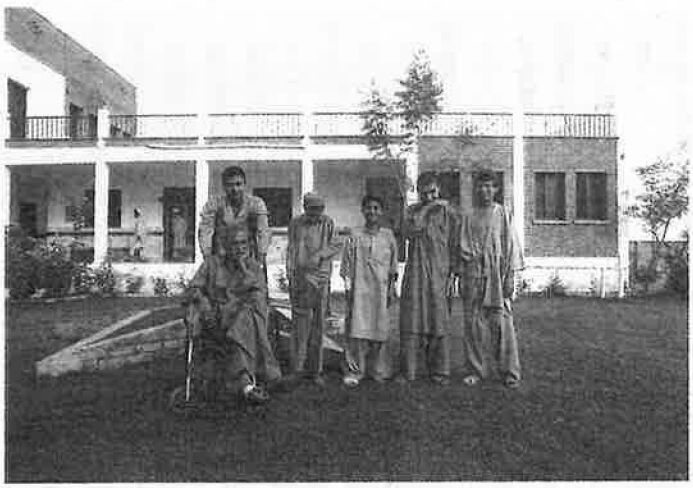
現地は元々、「写真は御法度（はっと）」の国だ。見ず知らずの人にレンズを向けるなんてことはなかなか度胸が要る行動であって、それこそ女性に向けるなどというのは命知らず恥知らずの自殺行為である。最初のカットはそういった状況の中で、渡航から数週間ほど経って撮影されたものだった。

病院には多くの患者が入院していた。現地では女性が入院する場合、身内の男性が付き添うのが一般的だ。「家族は自分たちで守る。他人に任せちゃいられねえ……」といった具合に、少しばかりべらんめえ調の男たちが、外から女性病棟を見守っているわけである。PMS病院はここらへんが少し違っていて、「あとはヨロシク頼んだぜ」とばかりに、男たちが病院を信用して家に帰って行くのだ。ペシャワール会の二〇年以上にわたる現地活動で築いてきた信頼関係を、こういった光景から感じ取ることが出来る。

私はこの関係を知ったとき、カメラのシャッターを切ることがコワくなってしまった。私の軽はずみな行為によって、そういった信頼関係がいとも簡単に崩壊することだってあり得るのだ。こいつは右も左も分からないような時期に、カメラなんか持ち出しちゃいけないな、と思い、しばらく鞄の中にしまい込んでしまった。

男性病棟にアクタルという名の片言の英語が話せる入院患者がいて、現地語はおろか、英語すらろくに話せない私は、仕事が終わるとすぐに彼のもとへ押し掛け、とにかくいろんなことを彼から学んだ。いま思えばその教わった内容が正しかったのかどうか甚だ疑問な部分もあるけれど、そうやって彼と長いこと会話を続けていたある日、「私はアナタを写真に撮ろうと思うのだ」、と話しかけたのだった。彼は「よっしゃ！」といった仕草で撮影を快諾してくれた。……最初のカットは、彼と彼の入院仲間たちを病院の中庭で撮った、私なりの壮大なドラマの中から生まれた一枚だった。

現地の状況はめまぐるしい早さで変化し続けている。それは度々送られてくる会報を読めば簡単に想像がつく。私が居た頃とはたくさんの事や物が変わっているだろう。ただしかし、いつの時代も、現地の人々がPMSを信頼して共に汗をかいてくれているという点だけは変わらない。そんな、信頼されるペシャワール会の活動へ、私もエールを送り続ける。



中山さんが赴任中撮影した患者さんたちの写真

●事務局便り

＊ダラエヌールの農業指導をされている高橋さんから伺った話である。高橋さんは、京都府の農業指導員を定年退職された後、アジア各地に赴かれた。その時、長期滞在する宿舎、治安のいい地域を決めるには何を目安にするか、という話であった。「塀の低い集落がね、安全なんですわ」と高橋さんはおっしゃった。つまり塀が高くて家の周りを強固に鎧った家の多い地域は、治安が悪いということである。今の時代、塀を高くし守りを強固にするほど安全性は高まると思いこんでいやしないか。高橋さんの話には、治安や安全ということに関する鮮やかな逆説がある。

＊アメリカの国家情報長官によると、米軍とアフガンの現政権が把握しているのは、国土の三〇パーセントだという。残りはタリバンと部族、軍閥ということになる。中村医師にその話をすると、「三〇？いや点と線だけですよ」ということだった。旱魃が止まず、大河の流域以外の小麦も壊滅的だという。春の雪解けと共に、反政府勢力の大攻勢が予想される。空爆にしろ、自爆テロにしろ巻き添えを食うのはいつも健気に生きる庶民、農民である。厳寒の中、カーブルの郊外だけで千を越える凍死者があったという。ほとんどが幼い子供達である。カルザイ政権がタリバンとの妥協策を探ろうとしているとの話もある。戦火を交えぬ和平への道を祈りたい。

㊋村から――――――♪

書斎の整理をしていたら、古いノートが出てきた。「一九九四年一月一九日より事務局に出る」と書いていた。あれから一五年目、その間いろいろなことがあり、飽きることなどなく、生活の一部として過ぎてしまった。現地の活動は拡大を続け全国からの支援も途絶えることなく続いている。二〇〇一年一〇月からの膨大な支援の件数は今もあまり変化なく続いている。仕事が増えるに伴ない事務局体制も変化した。昼間仕事がある人達が多かった当初とは異なり、今は事務的なことは昼間で処理出来るようになった。いろんな年代の人達の参加でとても賑やかな事務局だ。意見の違いがあっても仕事のミスがあっても何とか上手に折り合って全国の方々と共に現地の活動を支え続けたいと思っている。それにしても戦争中、飛行機工場での勤労奉仕の経験をされた方々のパワーには圧倒され「年だから引退しよう」など言うわけにはいかないといさか衰えた体力を騙しながら、週二日の作業を楽しんでいる私です。（KK）

医者、中村哲 【重版】1890円
用水路を拓く
アフガンの大地から
世界の虚構に挑む
●養老孟司氏絶讃　用水路建設事業の７年を綴った激動の記録
丸腰のボランティア
すべて現場から学んだ
中村哲編　【2刷】1890円
空爆と「復興」【2刷】1890円
辺境で診る　【3刷】1890円
辺境から見る
ダラエ・ヌールへの道
【3刷】2100円
医者 井戸を掘る　【10刷】1890円
医は国境を越えて　【6刷】2100円
ペシャワールにて　【8刷】1890円
聖愚者 甲斐大策の物語

1890円
石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL 092(714)4838
アフガニスタンの診療所から
609円
筑摩書房　東京都台東区蔵前2-6-4 TEL 03(5687)2670
価格はすべて税込価格（税5%）です

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。
②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号　TEL〇九二―七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603
電話（092）731（2372）FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2008年４月１日　No.95　会長 後藤哲也　現地代表 中村哲　名誉会長　高松勇雄